

3.2 地形地質（ピット）調査

1) 調査概要

草谷断層の伏在位置において、断層位置を特定し、トレンチ位置・規模を決定するために、事前ボーリング（(3)の項参照）により絞り込まれた箇所においてピットを掘削し、観察を行なった。

調査場所：加古郡稲美町草谷で1箇所（図3.2.1）

ピット規模：長さ42m×幅2m×深さ2.5m

掘削は、ボーリングBk-4孔の北側付近よりボーリングBk-3孔の北側に向けて南東～北西方向（本耕作地の北側の境界に沿って）に実施した。掘削深さは、ボーリングBk-4孔で深度1.61～2.00m間に認められた腐植土を挟む粘土～砂層の連続を迫える深度とし、2.5mに設定した。

2) 調査結果

掘削の結果、掘削壁面において、腐植土とシルト層の互層が掘削長さ約40mに渡ってほぼ水平に分布していることが確認された。引き続き掘削を進めたところ掘削長さ約42m付近で、井戸の遺構が出現した（写真3.2.1, 図3.2.2）。

この遺構を飛び越え掘削を続けたところ、遺構付近で腐植土とシルト層の互層が層厚を増し、約45m～46m付近で上部に急激に層厚を減ずるような変形が認められた。また、掘削底面（深度約2.5m）において下部の粘性土が南北走向（推定断層とは斜交）に引きずられたような変形も認められた。

以上の事からピット調査の約42～46m付近に断層が通過していると予想できたが、井戸の遺構が存在するため、稲美町立郷土資料館と協議の上、井戸を避け南西側にピットを拡幅する形でトレンチ調査を実施することに決定した。

ピット調査において認められた地層は、上位より以下のとおりである。

- a層：現耕作土
- b層：圃場整備による盛土及び旧耕作土を含む攪乱土
- c層：礫混じり腐植質シルト層
- d層：明青灰色粘性土層
- e層：腐植質シルト層
- f層：青灰色礫混じり粘性土層
- g層：砂礫層

これらの地層は、固結の程度からみていずれも沖積層の可能性が高いと判断された。以下、これらの地層の特徴について述べる。

a 層：現耕作土

暗褐灰色。礫混じり砂質シルト。

層厚は15～25cmで、ピット掘削前にはぎ取っている為、壁面には分布していない。

b 層：圃場整備による盛土及び旧耕作土を含む攪乱土

土質は、シルト混じり砂礫～礫混じり砂質シルト。褐灰～灰黄緑色。

c 層：礫混じり腐植質シルト層

腐植質な粘土質シルト主体で砂～礫を多く混在する。

掘削長さ0～32m付近まではφ50mm未満の亜角～亜円礫を多く混在し、長さ6～25m付近の基底部には、最大厚さ30cm程度のレンズ状に粘土質砂礫が挟まれる。上位のb層との境界は全体に不明瞭である。掘削長さ32m付近より北西側は礫の混入量が少なくなり腐植土層となる。

d 層：明青灰色粘性土層

土質は粘土質シルト～砂質シルト（シルト～微細砂）主体。

掘削壁面全長に渡って、層厚20～60cm程度で概ね水平に堆積している。

e 層：腐植質シルト層

掘削壁面全長に渡って、層厚5～20cm程度で概ね水平に堆積している黒色の腐植土。

掘削長さ42mの井戸の遺構付近では下部に垂れ下がって行く。

f 層：青灰色礫混じり粘性土層

掘削長さ0～37m付近にかけてe層の下位に分布する青灰色の粘性土層（シルト主体）で層中に一層の砂礫のレンズを挟む。

掘削長さ1m付近では層厚15cm程度であるが28～34m付近では層厚が厚くなり最大1m以上。

g 層：砂礫層

チャートの亜角～亜円礫を主体とする灰黄褐色～黄褐色の砂礫層。

礫径はφ50mm未満が多く、最大φ100mm以上。

草谷川の氾濫堆積物と考えられる。

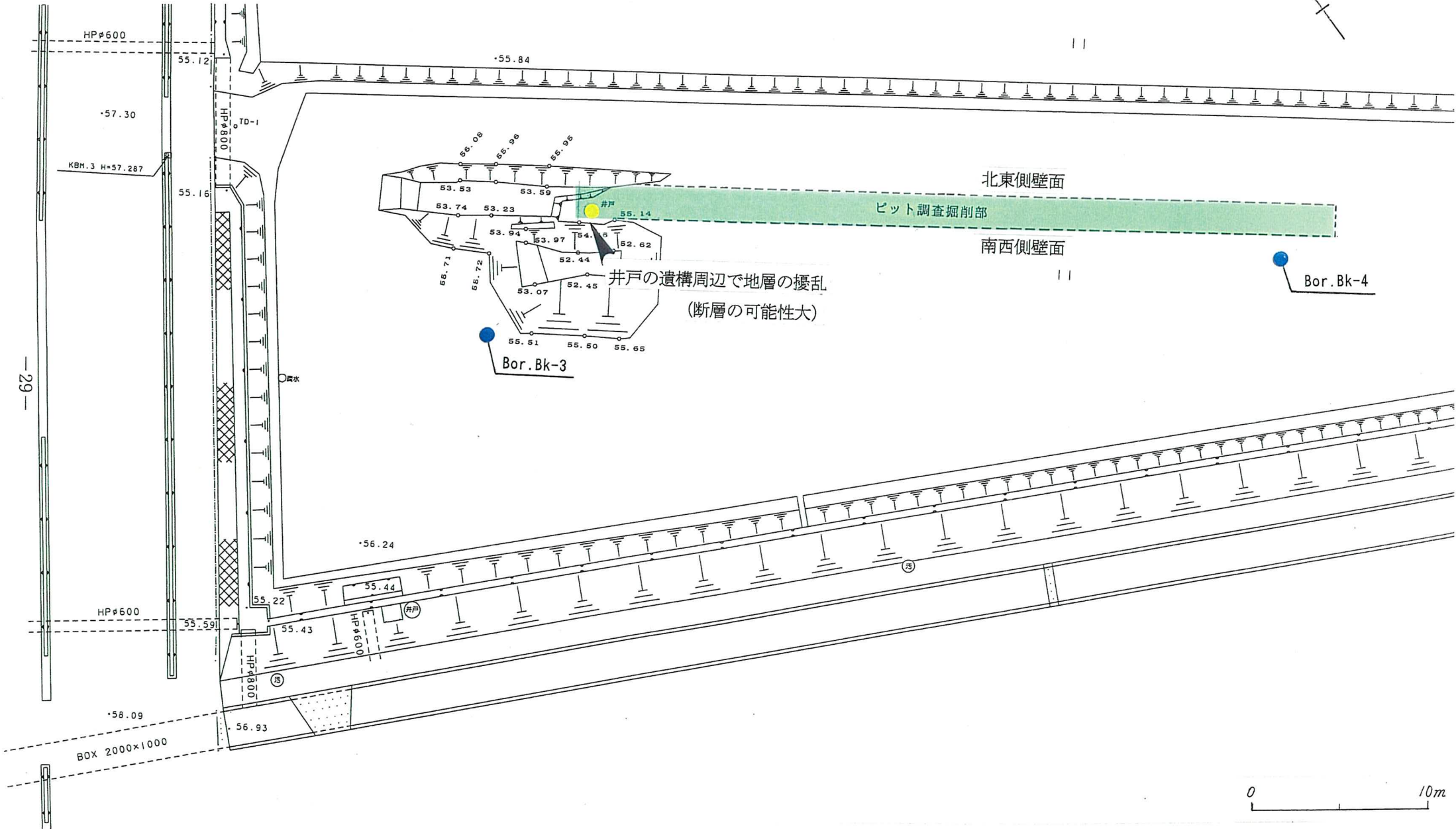


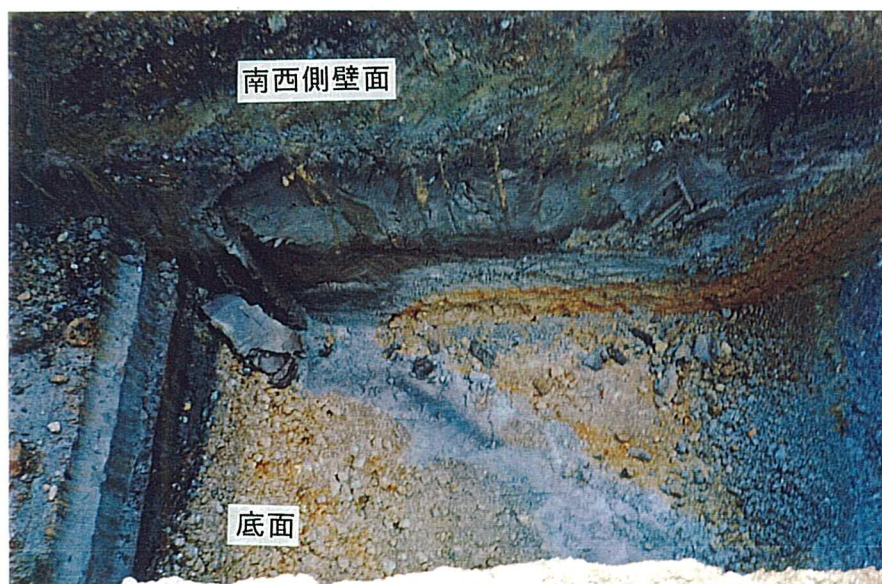
図 3.2.1 ピット調査位置図 (稲美町草谷B地点)



ピット調査部全景



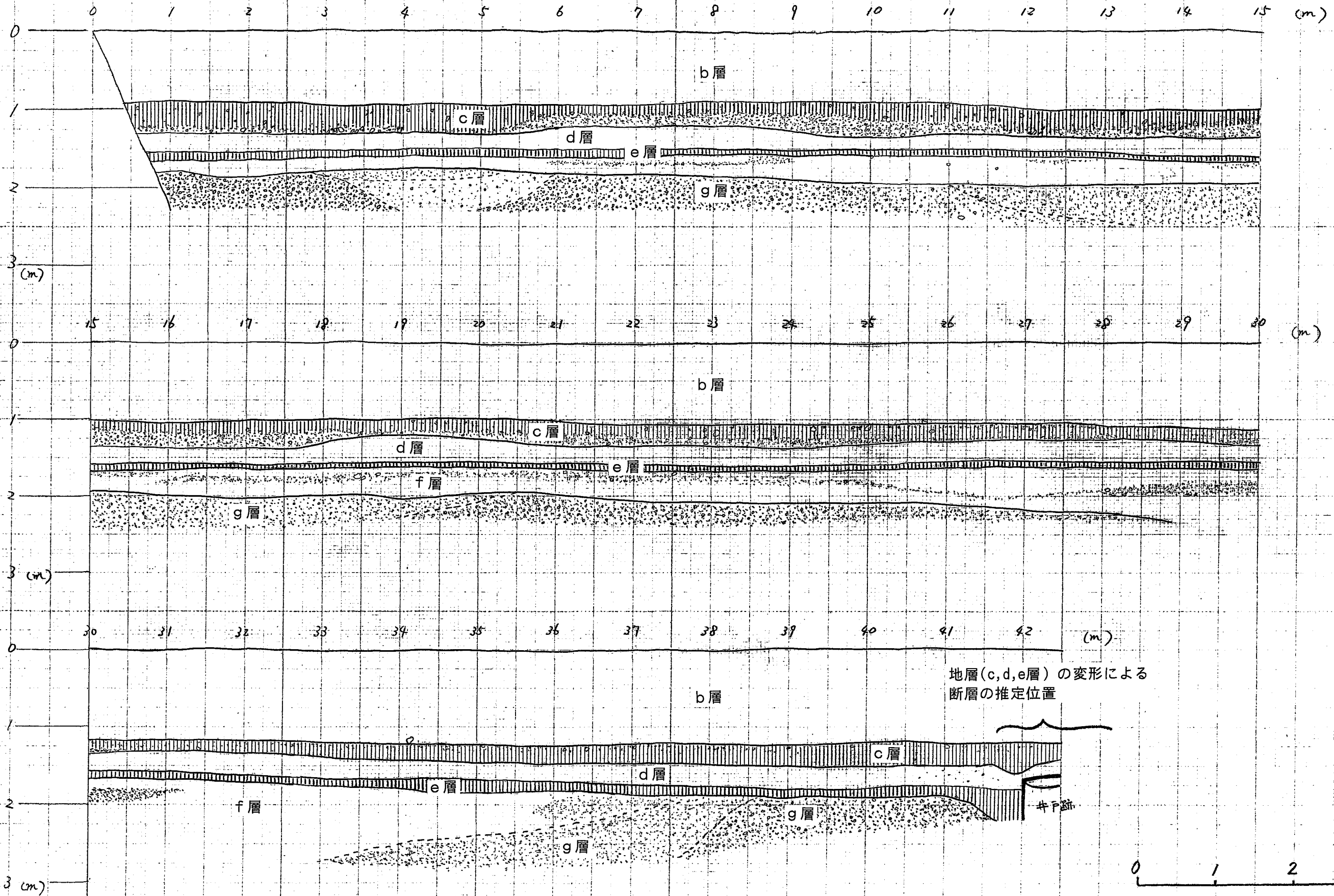
井戸の遺構付近の壁面（掘削長さ42m付近）



掘削長さ44～46m付近の地層（黒色腐植土, 灰色粘性土）の変形

写真 3.2.1 ピット調査現地写真

ピット調査南西側壁面



縮尺1:50

図 3.2.2 ピット調査南西側壁面のスケッチ (稲美町草谷B地点)